第 II 章　遺　構

1．遺跡の概要

遺跡は先端が二叉にわかれた丘陵上とその斜面に立地し、谷部は堰き止められ池となる。谷口に近い所にＡ、Ｂの２調査区が、二叉にわかれた南側の丘陵上にＣからＧの５調査区が、北側の丘陵にＨからＬの５調査区がある。昭和36年に作成した測量図面によれば、この丘陵上には池を取りかこむように馬蹄形の平坦面があり、池との比高差は約５ｍある。平坦面はその端で急に崖状に落ち、汀線に至る。発掘調査の結果この地形は、奈良時代の大規模な整地によって形成されたものであることが明らかとなった。整地前の旧地形は、現在池となっている谷がＩ調査区中央付近まではいり込み、南北の丘陵もゆるやかな勾配で、東へ伸びるものであった。整地はこの谷を埋めて平坦面をつくるとともに、谷を入口で堰き止め、谷奥からの涌水を利用して池を作ったものと考えられる。

2．遺構

これまでの４回にわたる調査で検出された遺構は、掘立柱建物14棟、溝５条、井戸１基、火葬墓２基、園池１などである。第118-2次，第118-20次、第151-6次、第156-11次の各調査は、小規模なトレンチ調査であり、検出された遺構の数も少ない。まずこの４回の調査について、トレンチごとに遺構を記述し、次に第151-26次調査の遺構について、奈良時代と平安時代とにわけ、遺構ごとに記述する。

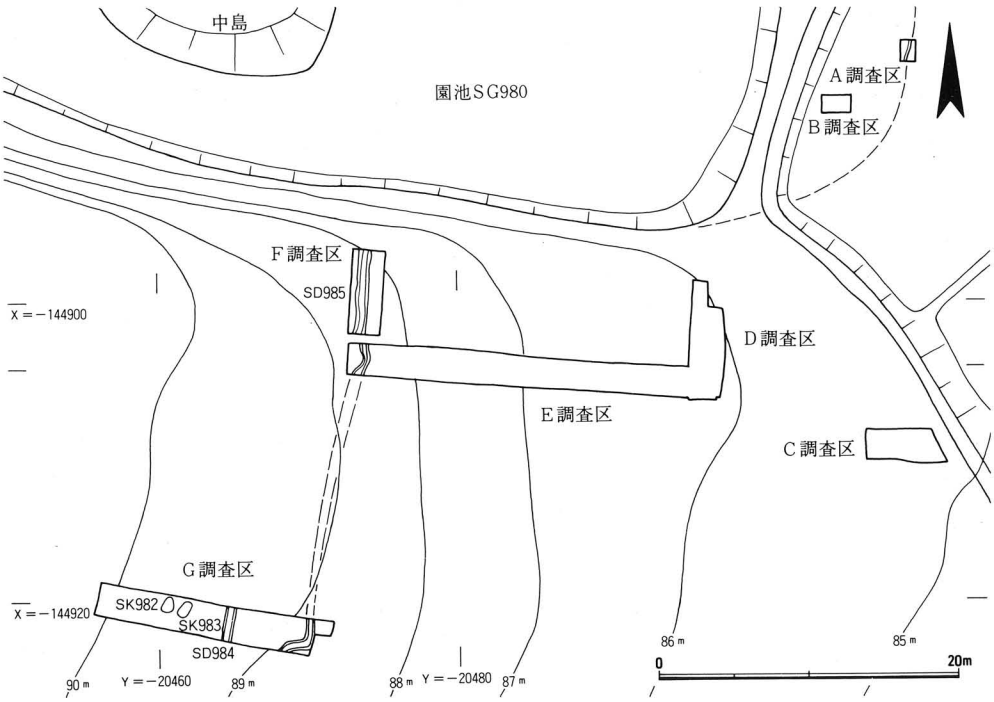


fig. 6　既往の調査遺構図

A．既往の調査　A・B両調査区は池の東側に設けた。旧水田面の上に0.3m～0.4mの盛土が覆っており、層位は盛土・耕土・床土の下に灰褐色砂質土、黄褐色砂質土、灰黒色粘質土、青灰色粘質土（地山）の順となる。この水田は谷の名残で、今はほとんどが住宅地になってしまったが、さらに東南方向に続いている。CからGまでの調査区は、所によっては1mに及ぶ盛土があり、層位は暗褐色砂質土、黄褐色砂質土、灰白色粘質土（地山）の順となる。K・L調査区はH調査区の北に設け、層位もほぼ同じである。

A調査区　幅0.9m、長さ1.2mの南北トレンチである。地山上で南北に走る園池SG980の東岸を検出した。池岸はゆるやかに西に向って傾斜しており、人工的な護岸は設けられていない。SG 980の埋土は植物腐蝕土、茶色砂質土の2層に分かれる。このうち植物腐蝕土中から土師器甕が、東岸の地山直上から須恵器円面硯が出土した。SG 980は、奈良時代にすでに存在しており、現在より東へ約10m広がっていたと推定される。

B調査区　幅1.1m、長さ1.9mの東西トレンチである。遺構は検出されなかったが、A調査区と同じ植物腐蝕土が及んでおり、調査区全体が池の中に当たるものと思われる。

C調査区　SG 980の東の堤防上を通る里道に接して東西に設けた調査区。幅2.0m、長さ4.9m。地表面が西から東へ向かって急に下がり、調査区西端と東端の比高差が1.6mある。昭和36年に作成した測量図面によれば、この地は西から東へ向かってゆるやかに傾斜しており、現在の地形は最上層の盛土によって形成された比較的新しいものであることが明らかとなった。遺構は検出されなかった。

D調査区　池の南側で、現汀線から南へ約2m下がった地点に南北に設けたトレンチ。幅2.0m、長さ7.0m。C調査区と同様な新しい時期の盛土によって、トレンチ南側が急傾斜で高くなる。遺構は検出されず、池の旧汀線に関する知見も得られなかった。

E調査区　幅2.0m、長さ24.0mの東西トレンチ。一部がD調査区と重なる。トレンチ西端で南北溝SD 985を検出した。SD 985は幅1.7m、深さ0.45mの素掘り溝である。F、G調査区でも検出しており、蛇行しながら南から北へ流れる溝である。中世の土器片や埴輪片を含む黄褐色砂質土上面より掘り込まれており、中世以降のものである。

F調査区　幅2.0m、長さ5.0mの南北トレンチ。トレンチ中央でSD 985を検出した。本調査区内では、ほぼ南北にまっすぐ流れる。

G調査区　幅2.5m、長さ15.0mの東西トレンチ。トレンチ東端で鍵の手に曲がるSD 985を検出した。トレンチ中央のSD 984は近代の地境溝。SK 982,983は平面不整楕円形の土壙。SK 982は長径1.2m、短径0.8m。SK 983は長径1.05m、短径0.7m。

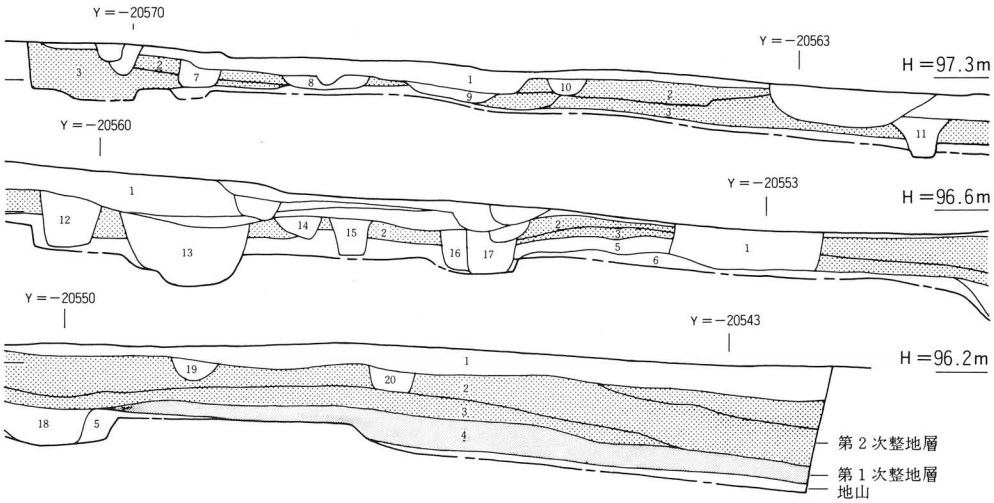
K・L調査区　K調査区は幅2.5m、長さ5.4mの南北トレンチ。L調査区は幅1.3m、長さ2.8mの東西トレンチ。地山は東へ行くにしたがってゆるやかに下がり、その上を第2次整地層が覆っている。遺構は検出されなかったが、第2次整地層中より埴輪片などが出土した。

B．第151-26次調査　151-26次調査では、掘立柱建物14棟、堀１条、溝５条、井戸１基、火葬墓２基などを検出した。これらは大きく、奈良時代の遺構と平安時代の遺構とに分けることができる。

奈良時代にはＨ調査区の西半分とＩ調査区の全面に厚い整地が行なわれ、主要な遺構はほとんどこの整地層上で検出した。整地は２回行なわれており、各整地層上面で遺構が検出された。ただし下層の遺構については、上層遺構との関係から補足調査による小規模な検出にとどまる。調査区の主な土層は上から、表土、暗灰褐色砂質土、灰黄褐色砂質土（以上２層　第２次整地層）、淡黄褐色砂質土（第１次整地層）、赤褐色礫混り粘質土（地山）の順となっている。整地土はＨ調査区南辺で最も厚く、表土下1.8ｍまで確認したが、地山の検出には至らなかった。調査時における所見から、奈良時代の地形は、池の汀線ぎりぎりまで整地によって平坦面を作りだすとともに、背後の丘陵頂部の高まりはそのままに残していたと推定される。遺構はこの整地による馬蹄形の平坦面全体に及んでおり、池の東側を除く三方を建物群が取り囲んでいたと推定される。

なおＪ調査区では、約20cmの表土直下がすぐ地山となり、遺構は地山から掘り込まれている。またＨ調査区の東半分には整地土が無く、地山上で遺構の検出を行なったが顕著な遺構は検出されなかった。その部分では遺物もほとんど無く、宿舎の建設時に大規模な削平を受けたものと考えられる。

平安時代の遺構も第２次整地層上面で検出した。奈良時代の遺構と平安時代の遺構とを整地土の違いで層位的に区分することはできなかった。



1 表土(旧宿舎時の土坑・溝)
2 暗灰褐色砂質土
3 灰黄褐色砂質土
4 淡黄褐色砂質土
5 赤褐色礫混り粘質土
6 赤褐色バラス
7 暗灰褐色砂質土(炭化物混入SB1095西側柱)
8 赤褐色粘質土(焼土・炭化物混入、SK1118)
9 淡赤褐色粘質土(焼土・炭化物混入、SK1117)
10灰褐色砂質土(SB1095庇柱)
11暗灰色粘質土
12茶褐色粘質土(SB1100庇柱)
13灰褐色粘質土(灰色粘質土混り、SB1080東側柱)
14褐色礫混り砂質土
15淡黄褐色砂質土
16暗橙褐色砂質土(SB1070西庇柱)
17暗褐色砂質土(SD1110)
18淡赤褐色砂質土
19暗灰褐色砂質土(赤褐粘土混り)
20暗褐色砂質土

fig. 7　Ｉ調査区北壁土層図

a．奈良時代の遺構

SB1000（PL．5）　H調査区西半にある、桁行９間（26.5m）・梁行２間（5.9m）の長大な掘立柱東西棟建物で、後に南面に庇が付加される。柱掘形は一辺1.2mほどの方形で、深さ1m強と大形である。身舎の柱掘形には、柱抜き取り痕跡のある西北隅柱を除き径30cmの柱痕跡が残り、柱間寸法は桁行・梁行とも３m弱（10尺）に復元できる。西妻柱と西南隅柱の２ケ所で、柱を据え直したと思われる痕跡が認られる（fig.８）ので、部分修理があった可能性がある。なお南庇は、南面雨落溝ＳＤ1005を埋め戻して増築されたと考えられる。庇の出は約4.2m（14尺）と広い。柱掘形は不整形で概して浅く、身舎の梁行柱筋とかならずしも揃わないものもある。したがって庇の構造は、両端を除き繋には梁を用いないような簡素なものであったと考えられる。東から６番目の柱掘形より須恵器椀が出土した。

SD1005・1010　ともにＳＢ1000の周囲を巡る位置にある素掘構。ＳＤ1005はＳＢ1000の身舎南側柱筋の南約1.8m（６尺）にあり、幅60cm、深さ10cmほどで、柱筋に沿って東流し、ＳＢ1000の東南でＳＤ1010と合流するものと思われる。西端はＩ調査区で検出されていないので、西妻柱筋に沿って北へ折れると推定される。

ＳＤ1010は身舎北側柱筋の北約1.5cm（５尺）にある。ＳＤ1005に比べて出はやや短いが、幅60cm、深さ10cmほどで柱筋に沿って東流し、東端で東妻柱筋に沿ってやや南西方向に斜行しながら南流する。なお西端が西北方向に延びる点は、上流の周辺に他の遺構が存在することをうかがわせる。ＳＤ1010の埋土からは須恵器杯蓋、軒平瓦が出土した。

SD1015　ＳＢ1000の東約2mの位置にある素掘南北溝。幅30cm、深さ10cm。第１次整地層上面でその一部を検出した。埋土に土師器片や炭化物を含む。

SE1025　ＳＢ1000の背面東寄りにある井戸。掘形は東西2.3m、南北3.7mの方形で、深さ2.5m以上ある。井戸枠は未検出であるが、遺構検出面から約２mの位置で厚さ10cmほどの炭化物混りの暗灰色粘質土が堆積しており、それより下層の掘形中心部に井戸枠が存在したことを示唆する径80cm、深さ30cm以上の淡灰色砂質土が存在する。埋土が西肩から東下りに斜めに堆積することからみて、井戸枠の一部を抜き取ったあと、暫時放置され、その後一気に埋め戻されたと推定される。埋土から土師器の小片が出土した。

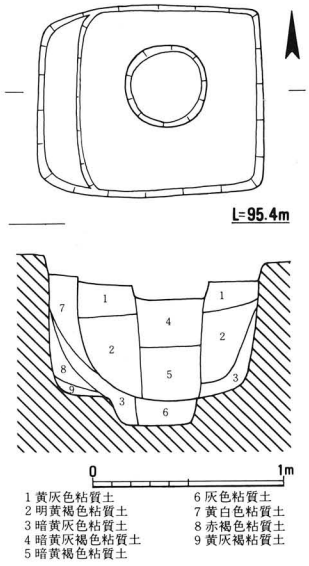


fig.８　ＳＢ1000
西妻柱掘形断面図

SK1035　ＳＢ1000の身舎内に位置する不整形の浅い土壙。東西2.6m、南北2.8m、深さ20cm。土師器杯が出土した。

SB1040、1045　いずれもＳＢ1000の北にある掘立柱建物で、一部を検出したにとどまる。ＳＢ1040は柱掘形を３個検出した。それらを南北の側柱のものと考えると、梁行２間の東西

棟建物に復原できる。柱間寸法は桁行2.7m(9尺)・梁行1.8m(6尺)。SB1045は柱掘形1個を検出したのみである。柱掘形は方形で一辺70cm。径25cmの柱痕跡がある。

SA1060　I調査区東寄りにある掘立柱南北塀で、2間分を検出した。柱掘形は一辺80cmほどの方形で、深さは約70cmある。柱痕跡は残らないが、柱間寸法は約3m(10尺)等間と考えられる。一部分を検出したにすぎないが、SB1070をはさんでSB1100とは等間隔(約4.5m、15尺)の位置にあり、柱位置もSB1100の梁行柱筋とほぼ揃うので、これらと同時期の区画塀と推定できよう。

SK1065(PL. 13)　第1次整地層上面から掘り込まれた土壙。SB1070の西北隅柱と重複する位置にある。長さ1.0m、幅0.7mの隅丸長方形を呈し、深さ約20cm。側壁が赤褐色に焼けており、底面に薄い炭化物層が残る。

SB1070(PL. 9)　I調査区のほぼ中央にある掘立柱南北棟建物。桁行2間・梁行2間の身舎の四面に庇が付く平面になる。柱間寸法は桁行方向が身舎・庇とも2.4m(8)等間になるが、梁行方向は身舎が1.8m(6尺)等間、庇の出が2.1m(7尺)とやや短い。柱掘形はほとんどが一辺70cmほどの方形で、深さ約50cm。掘形中央に径30cmほどの柱痕跡が明瞭に残る。ただし、西面庇南1間目及び身舎南妻柱の柱掘形は、一辺1.5mの方形で、1.5mほどの深さがある。いずれも掘形の⅔以上を版築状に堅く埋め戻した後に柱を建てている。

SB1080A, B(PL. 8)　I調査区西北にある南北棟建物。SB1080Aは掘立柱建物である。桁行2間(4.2m)以上・梁行2間(5.4m)で、柱掘形は一辺1.2～1.5mの隅丸方形、深さ80cmほどと大形である。南妻柱筋及び東側柱南1間目の柱掘形には、柱抜き取り痕跡

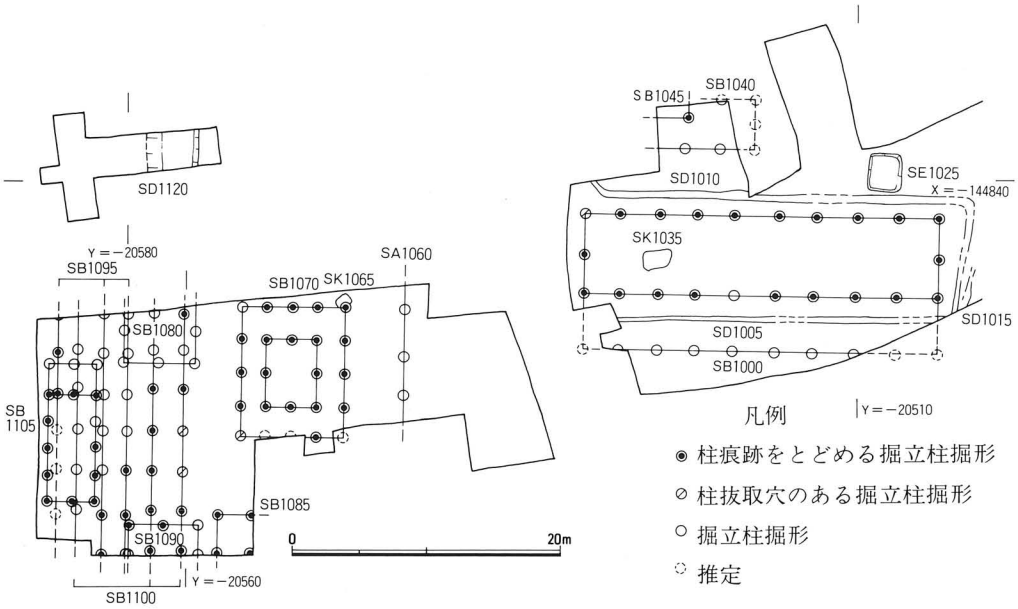


fig. 9　奈良時代の遺構配置図

がある。ＳＢ1080ＢはＳＢ1080Ａの廃絶後、同位置に再建された建物である。東西両側柱南１間目の柱位置では、旧柱掘形の全部又は一部に瓦を層状に敷きつめる地業を施しており（fig.10)、礎石建ちであった可能性がある。重複するどの遺構よりも時期は古い。なおＳＢ1080Ｂの西側柱南１間目の柱掘形から軒丸瓦・軒平瓦が出土した。

ＳＢ1085　ＳＢ1070の南側に建つ掘立柱建物で、東西１間（2.4ｍ）．南北１間（3.0ｍ)以上になる。柱掘形は一辺80cmの方形で、深さ30cmと浅く、遺構面が削平されたことを示す。南北棟掘立柱建物ＳＢ1100とは梁行柱筋を揃えて建つので、一連となる可能性もある。

ＳＢ1090Ａ．Ｂ　ＳＢ1080の南に位置する南北棟掘立柱建物で、桁行１間（3.0ｍ)以上・梁行２間（5.4ｍ）である。ＳＢ1080と柱筋を揃えて建ち、同じく建て替も認められる。ＳＢ1090Ａは、一辺1.2～1.5ｍ、深さ0.9ｍほどの大形の柱掘形をもつが、ＳＢ1090Ｂの柱掘形は一辺60cmほどで小さく、柱痕跡（径20cm）が残る。建て替えの時期はＳＢ1080Ｂと同時期であろう。

ＳＢ1095　Ｉ調査区の西端に建つ、掘立柱南北棟建物で、桁行６間（17.8ｍ）以上・梁行２間(3.3ｍ)の身舎の東面に庇(庇の出1.8ｍ、６尺)が付く。身舎の柱間寸法は、桁行3.3ｍ(11尺)・梁行1.65ｍ（5.5尺)。柱掘形は一辺60cmの方形で全般的に削平を受けており、一部の柱掘形は失なわれたものと考えられる。棟通りにも１間毎に柱が立ち、柱掘形のレベルは東方のものほど低いので、床張りの建物であったと考えられる。柱掘形の重複からＳＢ1105より古い。

ＳＢ1100（PL. 8）　ＳＢ1095の東側にあり、これとほぼ同様な平面をもつ掘立柱南北棟建物。柱間寸法はＳＢ1095に比べ、桁行方向は同じく約３ｍ（10尺）であるが、梁行方向はやや広く、身舎が2.7ｍ（９尺）等間、庇の出は2.4ｍ（８尺)である。身舎内の棟通りに、一辺50～70cmの方形柱掘形があり、一部床張りであったと推定される。柱掘形の重複関係からＳＢ1095より新しい。

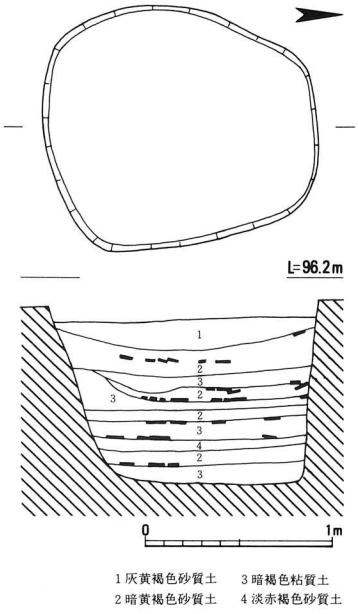


fig. 10　ＳＢ1080Ｂ
西側柱掘形断面図

ＳＢ1105　Ｉ調査区西端にある掘立柱南北棟建物である。桁行５間（10.4ｍ)・梁行２間（3.6ｍ）で、北から１間目に間仕切柱が立つ。柱間寸法は桁行2.1ｍ(７尺)。梁行1.8ｍ（６尺)。柱掘形は一辺50cm前後の方形で、径20cm強の柱痕跡が良く残る。柱掘形は全体に浅く、削平を受けたことをうかがわせる。

ＳＤ1120（PL.11）Ｊ調査区東端で検出された素掘の南北溝である。幅４ｍ、深さ0.5ｍ。埋土は大きく２層にわかれるが、遺物の出土は少ない。

b．平安時代の遺構

SB1020　桁行５間（8.8m）・梁行３間（4.8m）の東西棟掘立柱建物。桁行柱間は北側柱筋が最も良く揃い、1.8m（６尺）等間である。梁行柱は1.5m（５尺）等間。南側柱の柱間は東から1.8m（６尺）、1.8m（６尺）、1.5m（５尺）、1.8m（６尺）、2.1m（７尺）である。北側柱と妻柱の柱掘形は、径0.8m～1.0mの不整円形。南側柱はやや小形で0.6m～0.8の不整円形を呈する。西南隅の柱掘形で径34cmの柱痕跡を検出した。東で南へわずかに振れる。南側柱筋がＳＢ1000の身舎南側柱筋と重複し、ＳＢ1000より新しい。

SB1030　Ｈ調査区内で柱掘形４個を検出した。桁行３間（6.3m）・梁行２間（5.4m）の建物と推定される。柱掘形はいずれも径0.6m～0.7mの不正円形。柱間は桁行2.1m（７尺）・梁行2.7m（９尺）。北で東へ約25度振れる。

SB1050（PL.10）　Ｉ調査区内で柱掘形５個を検出した。梁行２間の南北棟掘立柱建物になるものと推定される。柱間は2.1m（７尺）等間。柱掘形は方0.9mで南妻中央の柱掘形に径23cmの柱痕跡が検出された。北で西へわずかに振れる。ＳＢ1055より新しい。

SB1055　桁行３間・梁行２間の掘立柱建物と推定されるが、柱間が2.1m（７尺）～3.0m弱（10尺）とまちまちで、各柱筋も大きく振れる。柱掘形は0.4m～0.5mの不整方形となる。ＳＢ1050より古い。

SX1074（PL. 13）　方形の墓壙に須恵器甕を埋納する火葬墓。墓壙は東西64cm、南北55cm、深さ24cm。甕内には炭化物がつまっていたが、骨片は確認されなかった。後世の削平によって、大部分を失なっており、甕はわずかに底部を残すだけである。そのため火葬墓と断定する根拠に欠けるが、炭化物を含む点や、すぐ北に火葬墓ＳＸ1075のある点などか

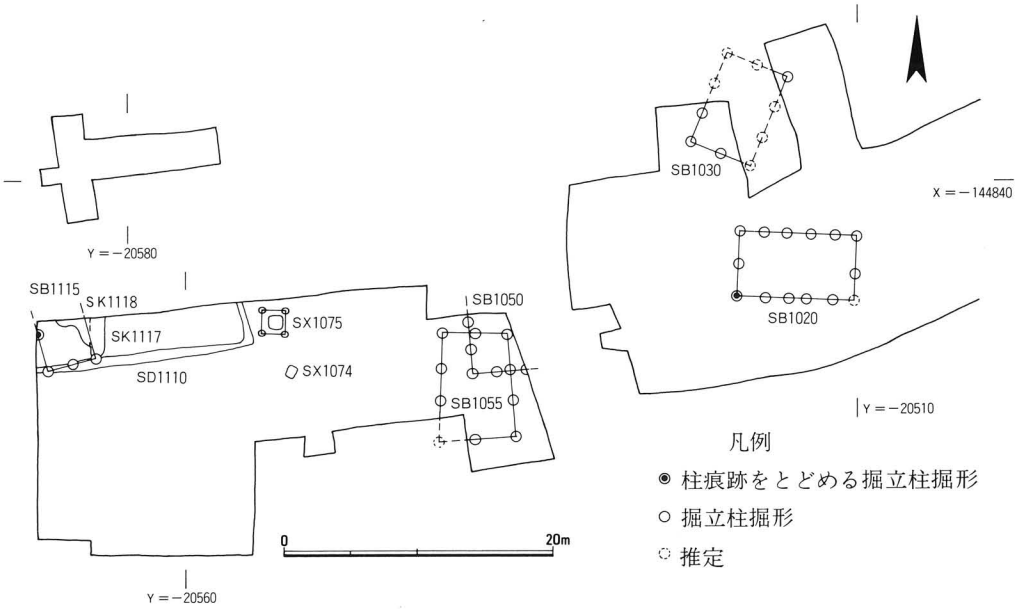


fig. 11　平安時代の遺構配置図

ら火葬墓と推定しておく。その場合、甕は蔵骨器とするには大きすぎ、蔵骨器自体というより、外容器と考えるべきであろう。

SX1075（PL. 12）　灰釉陶器壺を骨蔵器とした火葬墓。東西1.07m、南北1.0mの方形墓壙の中央に、骨蔵器を入れた長方形の木櫃を置き、まわりに木炭と土をつめている。墓壙のまわりを掘立柱4本がとりかこみ、SB1070の柱掘形を切っている。以下墓壙、木炭層、木櫃、掘立柱の順に記述する。

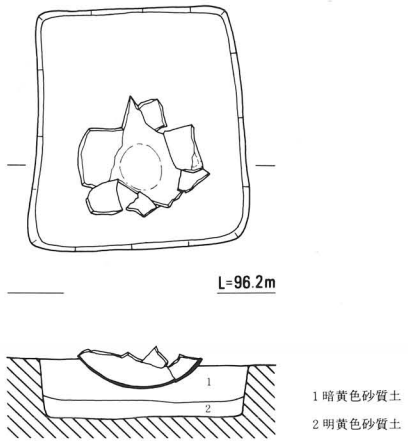


fig. 12　SX1074遺構図

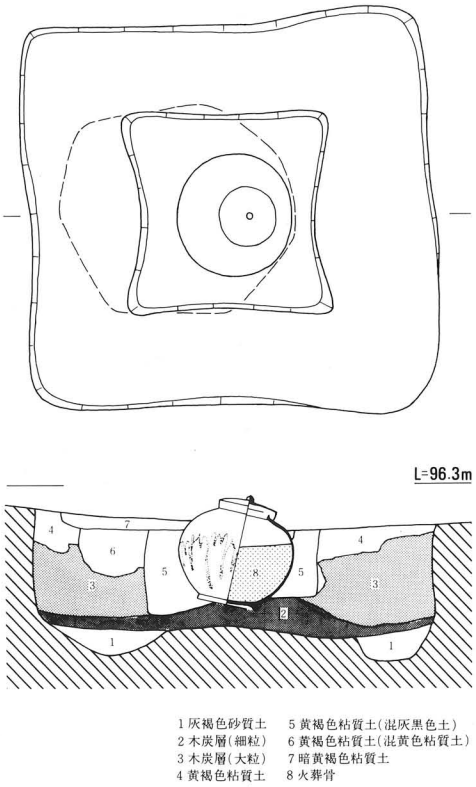


fig. 13　SX1075遺構図

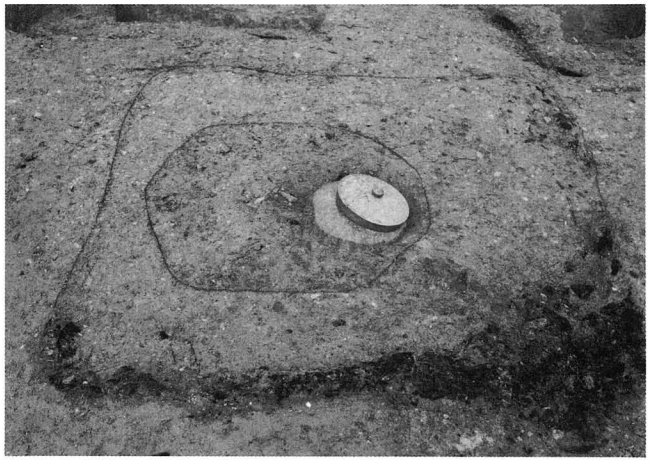
墓壙　第2次整地土上面から掘り込まれ、最も深い所で深さは38cmある。骨蔵器の大きさや木櫃の存在から考えて、本来はその倍以上の60cmほどの深さがあったものと思われる。墓壙底は著しい凹凸があり、それを灰褐色粘質土で埋めて平坦な底面をつくっている。この凹凸は鋤などで掘削したそのままの状態を示すものと思われる。

木炭層　木炭層は大きく2層に分けることができる。まず墓壙底一面に下層の細かい粉炭状の木炭を敷く。検出した時点では骨蔵器の高台部分が下層の木炭層にめり込んでいたが、断面で見ると当初はこの木炭層の上に木櫃を置いたものと考えられる。上層の木炭層は、比較的大きな木炭を木櫃のまわりに約10～20cmの厚さで詰めている。木櫃と上層の木炭層の間には、一部に裏込め土と思われる黄褐色粘質土を詰める部分もある。木炭層の上には、黄褐色粘質土を入れて墓壙全体をうめもどしている。検出当初骨蔵器のまわりに不整六角形の落ち込みが認められた。これは木櫃の腐朽に伴う陥没であろう。またこの陥没によって、今見るように骨蔵器が東へ約15度傾むいたものと推定される。多量に出土した木炭のうち、比較的大形でしっかりした破片をえらび樹種鑑定を行なった結果、アカガシ亜属とヒノキ(?)の2種であった。

木櫃　木櫃自体は、鉄釘に付着する木質以外にはまったく残っていなかったが、木炭層の形状と鉄釘の出土状態から、その大きさと構造が推定される。東西55cm、南北50cmの長方形で、高さは後世の削平のため不明であるが、骨蔵器の大きさから40cmほどのものであったと推定される。木櫃の側面は土圧によって大きく内湾し、特に東西両側面が著しい。四隅を中心に鉄釘がまとまって出土した。検出面近くを除き、現位置を保っているものが多いが、木櫃のたわみや腐朽に伴なって内側へ倒れ込んでいるものも多い。

掘立柱　墓壙の周辺の４ヶ所に、方30cmほどの柱掘形を検出した。柱痕跡は検出されなかった。柱間はいずれも1.5m（５尺）である。規模が小さいところから、上部構造を伴うものか、柵のようなものか不明であるが、火葬墓の地上施設として注目される。

SD1110（PL. 9）　Ｉ調査区西北で検出した素堀り溝。Ｌ字形に曲がり発掘区の北と西へつづく。断面はＵ字形で幅0.5m、深さ0.5m。埋土は大きく２層にわかれ、上層は旧宿舎の排水管によって攪乱さ



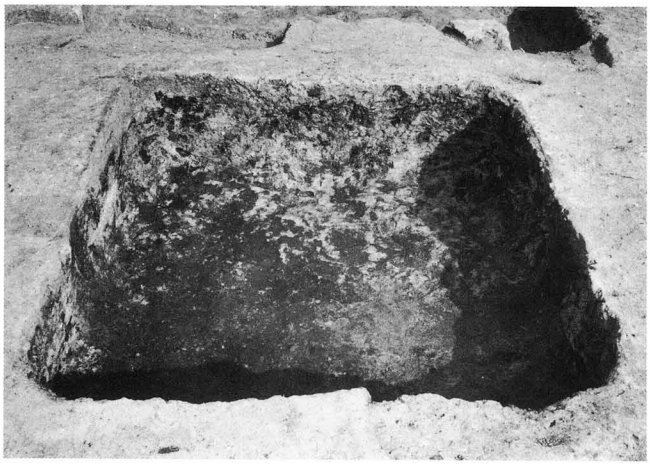


fig. 14　ＳＸ1075　発掘経過

上：検出状況
中：発掘状況（手前墓壙完掘、奥木炭層露出）
下：完掘後（墓壙）

れている下層は暗灰色粘質土で均一に埋まっており水の流れた痕跡は見られなかった。北西に存在が予想される何らかの遺構に関係した区画溝と考えられる。重複する柱掘形を切っている。軒瓦を含む瓦の出土が多い。

SB1115　Ⅰ調査区西北隅で検出した桁行２間以上・梁行２間（3.6m）の南北棟掘立柱建物。柱間は桁行1.8m（６尺）・梁行3.0m（10尺）。西側柱南から２番目の柱掘形は残りが良く、径35cmの円形掘形に、径10cmの柱痕跡がある。南妻柱筋がＳＤ1110に切られており、柱掘形の一部を検出しただけである。北で西へ約15度振れる。

SK1117・1118　Ⅰ調査区北西隅にある浅い土壙。ＳＫ1117は幅1.2m、深さ7cmで南北の溝状を呈する。ＳＫ1118は東西2.7m以上、南北1.3m以上、深さ5cmの不整形な土壙。Ⅰ調査区北西隅は、攪乱が著しく遺構の遺存状態が悪い。ＳＫ1117と1118は本来同一の土壙であった可能性がある。埋土中より、軒丸瓦、焼土、焼土塊、鋳型、るつぼ片が出土した。

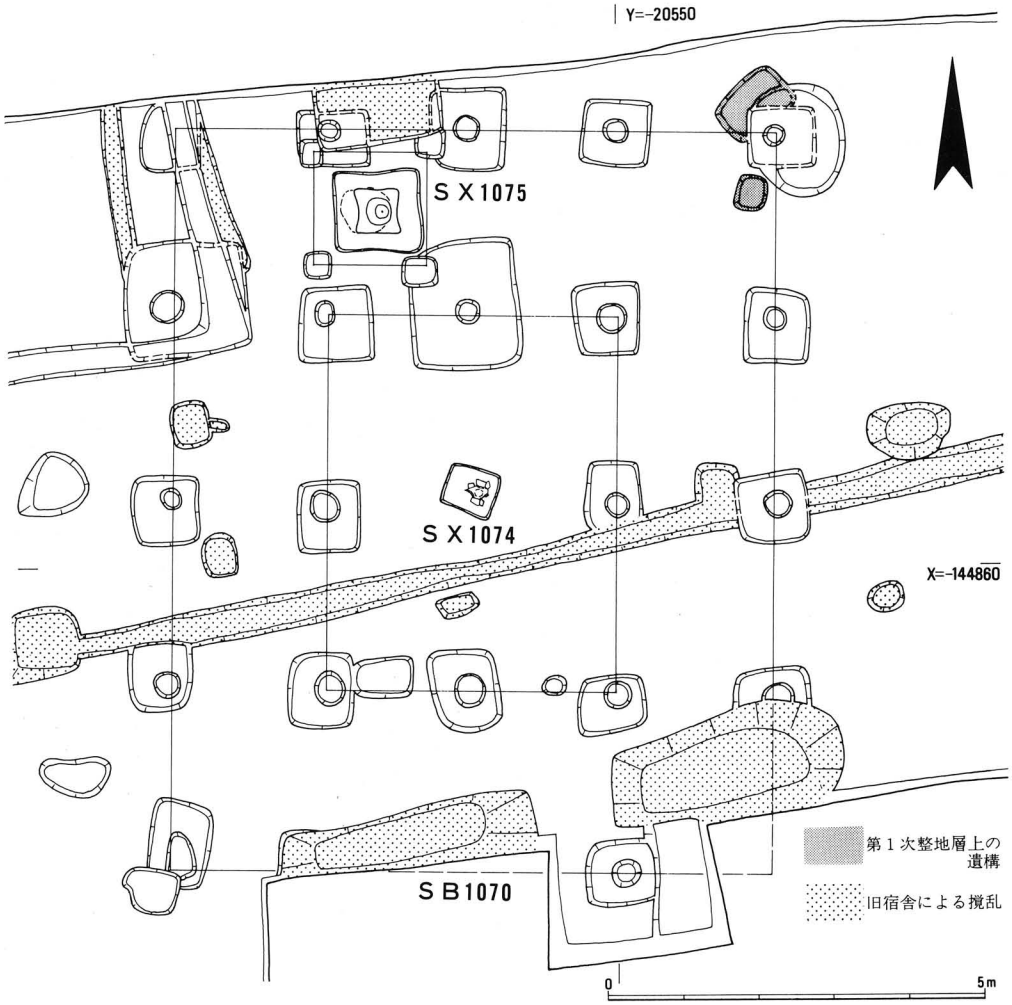


fig. 15　ＳＸ1074・1075　周辺遺構図